女性会連盟 100 周年に向けて

日本ルーテル女性会連盟は2028年に100周年を迎えます。そこで、女性会連盟26期役員会では、これまで日本のキリスト教宣教の為に尽くしてくださった宣教師の方々を５回にわたって紹介するシリーズを展開しています。４回目は東京都の「ベタニヤホーム」、千葉県の「千葉ベタニヤホーム」などの母子支援施設、そして福音宣教に力を尽くされたエーネ・パウラス宣教師のお働きを紹介します。

わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、
わたしにしてくれたことなのである　　マタイ福音書 25:40

行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです
ヤコブの手紙２：17

信仰による愛の実践－米国宣教師　エーネ・パウラスのお働き



A. パウラスと子どもたち



A. パウラス

１．関東大震災の救援活動から施設運営へ：

1923年９月１日、関東大地震が発生しました。大規模な延焼火災に拡大し死者・行方不明者は10万人以上という甚大な被害をもたらしました。日本福音ルーテル教会は直ちに救済委員会を設置し、東京麻布のスペイン大使館の敷地を借り受け、罹災した高齢者や母子の救護を開始しました。西東京市にある現東京老人ホームと墨田区にあるベタニヤホームの働きの始まりです。母子の居場所を現東京都墨田区江東橋に移し母子ホームを設立しました。当時エーネ・パウラス宣教師（以下Ａ．パウラス）は、姉のモード・パウラス宣教師と共に熊本の「慈愛園」で乳幼児教育に携わっていましたが、要請を受けて上京、ベタニヤホームの責任者となり「社会福祉法人ベタニヤホーム」の礎を築きました。

Ａ．パウラスの教育方針「人間は人間であることを学ばねばなりません」

２．千葉県内への事業展開：

Ａ．パウラスは千葉県市川市国府台に住居を構え、1931年に自宅を開放し、母子ホームの虚弱児の養育を行ないました。「社会福祉法人千葉ベタニヤホーム」の始まりです。

３．施設内の礼拝から教会誕生へ：

施設内でキリストの愛を伝え、週１回母子ホーム内にて聖書の学びと礼拝。毎日曜日の礼拝を守りました。ホーム外からも出席があり、施設の職員・利用者に根付き1935年に本所教会（現聖パウロ教会）が開設されました。また数十年の働きの中で多くの施設が生まれ、そこからいくつものルーテル教会が誕生しました。

４．Ａ．パウラス帰国と東京大空襲：

戦争は第二次世界大戦へと拡大し、A. パウラスは母国への帰国を余儀なくされました。本所教会の内海季秋牧師が施設の責任者となり事業を継続しました。

1945年３月10日、アメリカ軍の大型爆撃機が東京下町に飛来しました。東京大空襲です。その際に施設が全焼。職員と母子家庭20数名の命も犠牲となりました。1946年、内海牧師は、全焼した施設の焼け跡に立ち思い巡らせました。

するとレンガ塀の間からいちじくが芽をだしていることを発見！これは復活の希望の芽だ！



東京大空襲を生き延びたいちじくの子孫

5．ベタニヤホームの再建：

終戦を迎え日本はＧＨＱの占領下に入りました。1947年に再来日したＡ．パウラスは、すぐにベタニヤホームの再建に取り掛かりました。戦後の物資不足等困難な状況の中、物資と寄付金集めに奔走しました。自ら家々を訪ね寄付を募り、自分の車で走り回り行政との交渉に出向きました。同年12月、児童福祉法が公布されたのを機に「本所ベタニヤ母子寮」（現母子生活支援施設）を新設。隣接する菊川幼稚園も菊川保育園として1951（昭和26）年１月に認可されました。

6．Ａ．パウラスに倣って：

1953年、江戸川区北小岩に「富士見保育園」を開設。母子ホームの退寮者家族には民間アパートを借り与えました。

やがて社会状況の変化に伴い入園希望者が増加。2007年には、墨田区緑に「こひつじ保育園」を開設しました。自立に向けた家庭的養護、子育て・就労支援、相談事業、地域交流、食支援など支援の輪が広がり、Ａ．パウラスの信仰による愛の実践は、人々に仕えるディアコニア精神として今も継承されています。終戦後再来日して宣教と社会福祉事業の大きな功績と実績を残したA．パウラスは、70歳で定年退職を迎え母国へ帰国し、1978年87歳で天に召されました。

約42年間、日本に於いてキリスト教宣教と子ども達や家族への支援に全力を傾けたご生涯でした。



当時の母子寮と菊川保育園（1968年）



菊川保育園　園舎（2011年）



富士見保育園　園舎（1953年頃）



母子生活支援施設　小学生学習会（2000年頃）